多良間村におけるヒレジャコ放流技術指導

宮古支庁産業振興課　鳩　間　用　一

1. 目　的

ヒレジャコ放流技術指導

2. 対　象

平良市漁協多良間支部

3. 協力機関

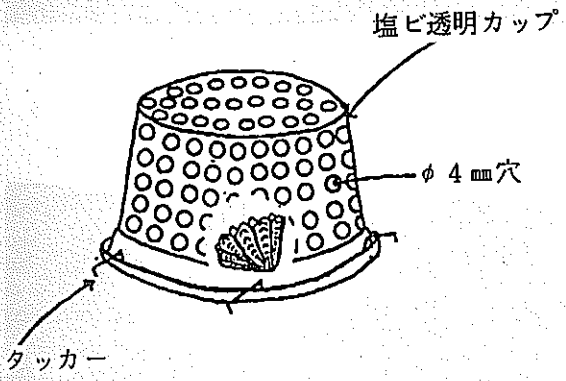
多良間村役場経済課

4. 日　時

平成8年6月3日(月)・6月4日(火)

5. 放流方法

八重山支場の研究報告から、ヒレジャコはヒメジャコと違って穿孔しないので、食害動物に襲われやすい、5㎝くらいまではカップを使って食害を防止しなければならない。そのため、下記に示した方法を用いて放流をおこなった。



6. 経　過

多良間村では、地元漁業者の協力で平成6年に2,000個のヒメジャコの放流をおこなっており、平成8年4月現在で平均殻長5～6㎝まで成長しており、また残存率も85%と好成績である。今回は、2,500個のヒレジャコの放流をおこなうが、これも前回同様に、平良市漁協多良間支部が主体となり、多良間村役場、宮古支庁と協力し、放流をおこなった。

平成8年6月3日（月）

午後2：30から多良間村公民館で説明会をおこなった後、午後3：00頃から、多良間漁港で放流作業をおこなった。

放流参加者は8名、潜水器が少いので常時潜水できる人数は5名で、2班に分かれて作業をおこなった。

潮がひいても干出しない場所ということで、水深1mから3mのところに放流したが、なるべくフラットな地形で、タッカーを打ち付けることのできる場所（岩が柔らかいところ）の選定に時間がかかった。

3時間程の作業で230個の稚貝が放流できた。

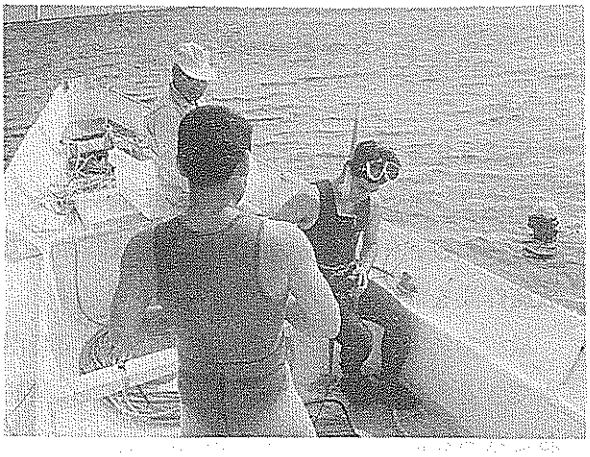
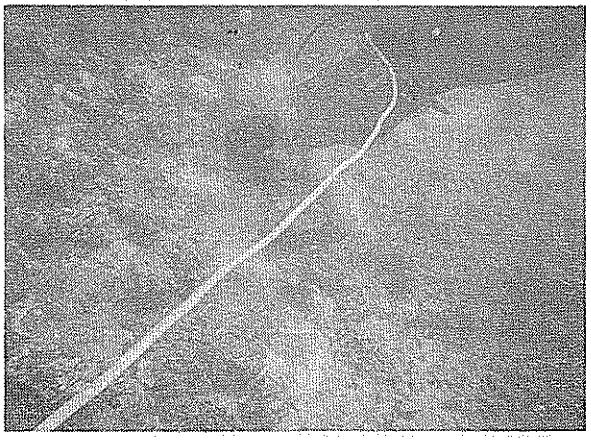
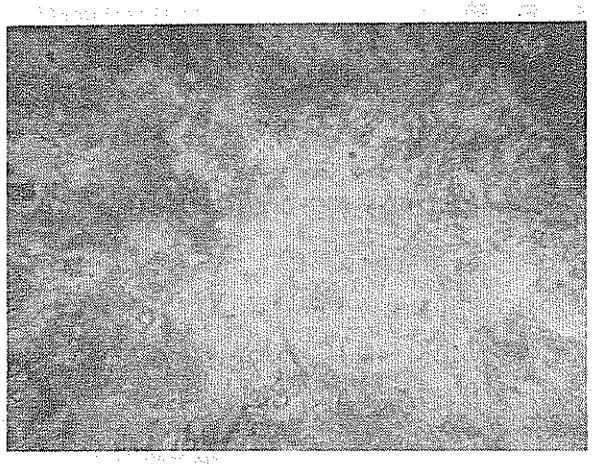
残りの稚貝は多良間水産の陸上タンクに収容し、また後日、放流することとなった。

平成8年6月4日（火）

多良間水産に収容した残りの2,270個の稚貝を観察した結果、約2,000個の稚貝の死亡が確認された。

理由としては、前日の放流作業を行っている最中、ビニール袋に収容してあったのだが、ビニール袋内の水が少なかったことと、直射日光に当たっての水温の急激な上昇によるものと考えられる。

7. 考　察

ヒレジャコの放流作業は、場所の選定が最も重要に時間がかかり、2,500個の稚貝を放流するには相当の時間と労力を要するものと考えられる。

また、今回、放流作業中に稚貝の管理を怠ってしまったために2,000もの稚貝を死亡させてしまった。今後は、このことについてもしっかり指導してゆきたい。